



合従連衡その一 (合従策の蘇秦)

1月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年1月1日(日)

呉起や商鞅の開いた道の後に、策士・説客の時代が訪れた。そして賢才を登用して強国を目指す戦国の風潮は、旧体制の解体に拍車をかけた。

商鞅の変法(改革)により、諸侯の雄となった秦と他の六国(燕・趙・韓・魏・齊・楚)の対立は二つの道、諸国が秦に対抗して攻守同盟を結ぶ「合従」か、秦に服属して存在を保つ「連衡」か、二者択一の選択に追い込まれていった。

稀代の大物策士蘇秦(～BC317)は「鬼谷子」の弟子でその活躍は「合従」を進めるものであった。

蘇秦は若いころ、鬼谷先生に師事して遊説術を学んだ。そして「遊説」の旅に出たが、食い詰めて故郷に戻ってきた。すると兄弟姉妹や妻までもが、“百姓仕事に励むとか、商いに精を出して二割程度を手堅く儲けるのが賢いやり方だ。「遊説」とか言って騒いでいるからこんな風になるのよ”。こう言われて蘇秦は、部屋にこもりきりで、周書の陰符研究一筋に打ち込み、「揣摩」という独特の読心術を編み出した。

“これで売り込むぞ”と最初は、秦の恵王に説いたが用いられず、次に燕の文侯に出会って説いた。「燕」の国の地の利、海陸の豊富な物産を褒め、趙と合従して秦に当れば燕の国威は上がると、意見を具申し、燕から趙への使節として車馬・黄金・絹布を支給され、趙に向かった。

趙へ赴いた蘇秦は趙の肅公に取り入り、燕・趙・韓・魏・齊・楚の六国同盟(合従)の利を説き、韓の宣惠王には“むしろ鶏口となるも牛後となる勿れ”と合従の利を強調し、その自尊心を搔き立てた。

その後、魏の襄王・齊の宣王・楚の威王に説いて、中国の南北に連なる六国同盟を成立させ、六国の宰相を兼任し、西方の秦に対抗した。

蘇秦が従約の書を秦に送ったため、秦は十数年間東方進出が出来なかったと言われている。

まもなく、「鬼谷子同門の張儀の連衡策」に破られるが、合従策が破れた後も、「縦横家」と呼ばれたその策士ぶりにいささかの衰えも見せなかった。

「縦横家」とはまさに、時勢の変化を洞察し、特に外交対策について巧みな弁舌をもって諸侯に説いた蘇秦に代表されるような人物である。

参考：(司馬遷史記、蘇秦列伝、徳間書店)